

研究ノート

風姿花伝に学ぶ 福祉を学ぶ学生のために

Learn from *Fushikaden* by Zeami
For the students working at welfare institutions

八窪 清

要約：本稿は、世阿弥が能の稽古のあり方を、年齢階層を7区分してその時に習得すべき技術と心がけるべき事柄を説いた「風姿花伝」に学ぼうとするものである。もとより、世阿弥と社会福祉が直に結びつく要素などない。しかし、それがなんであれ、道を極めた人のことばの中には時代を超え、専門領域を超えて耳を傾けるべき普遍的真理が蔵されていることが多い。「風姿花伝」はその一つである。

世阿弥は、能の稽古は7歳ころからは始めよという。奇しくも現在の就学年齢と符合する。この7歳を就職初年度の職員に置き換え、世阿弥が区分した年齢階層12、3歳をそれぞれ就職後2、3年、17、8歳を4、5年、24、5歳をおおよそ10年として想定し、各階層毎に世阿弥が習得すべき技術、心得として述べていることをそのまま福祉現場の職員に置き換えて論述した。置き換えの妥当性を根拠づけるに足る論理性のないことは十分、承知している。あくまでも本稿は、30年間の施設現場の経験則を頼みにした試論である。

Key Words：稽古、時分の花、誠の花、初心

はじめに

「風姿花伝」は、世阿弥が父親阿弥から口伝された能楽書である。冒頭で、申楽の由来とこの道に生きる者への戒めが短く述べられている。この部分は、いわば「まえがき」といってよい。すぐあとに、「風姿花伝第一年来稽古條々」の本文がはじまる。世阿弥は、能の稽古と向き合うにあたって年齢を7区分し、その節々に心すべきこと、あるいは身につけるべき必修事を丁寧に説いている。

本稿は、世阿弥が区分した年齢階層に福祉現場で働く職員を重ね、その節々で職員が心得ておくべき基本は何かについて述べている。

本論

七歳

「一、この藝において、大方、7歳をもて初めとす。この比の能の稽古、必ず、その者自然とし出す事に、得

たる風體あるべし。舞・働きの間、音曲、もしくは怒れる事などにてもあれ、ふとし出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさすべし。さのみ、よき、あしきとは教ふべからず。餘りにいたく諫むれば、童は氣を失ひて、能ものぐさくなり立ちぬれば、やがて能は止まるなり」

「風姿花伝」の本文は、このようにはじまる。世阿弥は、能の稽古は大体、7歳（数え歳）くらいからはじめたらよい、という。これは、現在の就学年齢と符合する。就学年齢の児童と就職期を迎えた青年を同列に論じることとはできまいが、それがどのような職業であれ初心者への配慮として、「さのみ、よき、あしきとは教ふべからず」という世阿弥のことばは傾聴に値する。「餘りにいたく諫むれば、童は氣を失ひて、能ものぐさくなり立ちぬれば、やがて能は止まるなり」だからであり、キレやすいとされる最近の若者たちに当初から厳しく接すると、やる気をなくして辞めてしまうことが十分考えられるからである。それが福祉現場であれば利用者のいのちと健康を守るための最低限のスキル、人間の尊厳性への気遣いなど、福祉に不可欠な原則を伝えるだけで、あ

とは世阿弥に倣い若者の得意とする領域が広がる環境を整えればよい。

十二、十三より

「この年の比よりは、やうやう、声も調子にかかり、能も心づく比なれば、次第々々に物数をも教ふべし。先ず、童形なれば、何としたるも幽玄なり。声も立つ比なり。二つの便りあれば、わろき事は隠れ、よき事はいよいよ花めけり」

12、3歳のころになれば姿かたちも整い、声も美しくなると、ただそれだけでも舞台の華になるといっている。能の稽古における12、3歳を、施設に就職して2、3年後の職員に置き換えて論じる。

健康できびきびと動く若い職員の姿は職場を明るくする。利用者にも頼もしく写るであろう。しかし、いつまでも新米であることは許されない。この頃になれば職場の雰囲気も分かり、利用者の実態も大方把握できているはずである。職員としての弁えもつく頃であり、指導的立場にある者も順序だてて支援のスキルを伝えることになる。

しかし世阿弥は、「大方、兒の申樂に、さのみに細かなるものまねなどは、せさすべからず。當座も似合はず、能も上がらぬ相なり」とつけ足す。この頃はあまり細かいところまで教え込む必要はない。年端もいかない子どもが格好をつけるのは見た目にも不似合いであり、そのようなことをしては将来伸び悩むことになると窺める。

若い職員には、若い職員だけのもつよさがあり、若い職員としての利用者へのかかわり方がある。にもかかわらず、新職の頃に小手先で利用者をあしらう術を身につけてしまうと楽をして仕事をするのを覚え、将来に期待がもてなくなるからである。

「ただし、堪能になりぬれば、何としたるもよかるべし。兒と云ひ、聲と云ひ、しかも上手ならば、何かはわろかるべき」と続く。それでも世阿弥は、「さりながら、この花は、誠の花には非ず。ただ、時分の花なり」とつけ足すことを忘れない。この頃の姿形は、そのまま舞台の花ではあってもその美しさは本物ではない。なぜならその花は、その少年の努力（稽古）の結果身についたものではなく、時分の花、つまり、美しくみえる年齢を迎えているだけのことで、時が移れば散ってしまう花だという。

新職らしい恥じらい、素直さ、きびきびとした動きは

施設の中に春の風を吹かせるであろう。高齢者の施設であれば、利用者はその中に遠い日の自分の姿をみて若くであろうし、古い職員には初々しさがマンネリズムへの反省の契機となるであろう。しかし、なかにはとんだ心得違いをする者がいる。周囲からちやほやされると、自分がなにものかになったと勘違いして、偉ぶるのである。周囲がちやほやするのはこれからの働きに期待するからであって、今のままをよしとしているわけではない。「時分の花」と、時が過ぎても散らない「誠の花」とを混同してはならないこと、自己覚知の肝要さがここにある。

「この比の稽古、やすき所を花に當てて、態を大事にすべし。働きおも確やかに、音曲をも、文字にさはさとは當り、舞をも、手を定めて、大事にして稽古すべし」と続ける。この頃の稽古はやりやすいところ、得意なところを見せ場にすればそれでよいといいながら、能の基本である身の動かし方を正確に覚え、ことばを一音一音明確にするように謡い、舞の一つ一つの型を大事にして稽古せよという。

就職して1、2年までに高等なスキルを身につける必要はない。しかし、利用者支援の基本となる重要事は採用当初から正確に、着実に身に沁みこませておく必要がある。そうでないと、ベテランといわれる年代を迎えてもほんものの実践家にはなれないのである。

十七、八より

ただ舞台に立つだけで美しかった12、3歳の頃と異なり、17、8歳頃になれば声変わりがしたり、羞恥心が芽生えたりして難しいときで、能で身を立てるか否かの非常に重要な分かれ道の時期だという。「この比の稽古には、ただ、指をさして人に笑はるるとも、それをば顧みず、内にては声の届かん調子にて、宵・暁の声を使ひ、心中には、願力を起して、一期の堺こなりと、生涯にかけて能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能は止まるべし」

厳しいことばである。おそらく、観阿弥、世阿弥の実体験に裏打ちされたことばであろう。一つの道を極めようとするなら、だれもが通らなければならない道である。能におけるこの年齢階層を、就職後4、5年と想定する。この頃、迷いの時期を迎える職員は多い。仕事に生きがいを求め、胸ときめかせて福祉現場に就職したものの、現実には自分が描いていた理想像とはほど遠い。自分の意見も通らない。そのうち日課はもちろん、当初は

熱くなって取り組んだ年中行事もマンネリ化し、利用者にも慣れて惰性で仕事をするようになる。こうなると“物”も“者”も同じになる。目を外に向けると他業種で働く同期の者たちが輝いて見える。自分だけが時代から取り残されるような寂寥感におそわれる時期である。こうして自分の手を必要とする利用者を残して施設を後にする職員は多い（くすのき寮の10年 1980：70～71表1，2）。

仕事に生きがいを求めること自体悪いことではない。否、むしろそのような職場に就ける人は幸せでさえある。しかし、福祉施設は職員の手を必要とする利用者あつてのもので、職員が生きがいを求めるための場ではない。生きがいを求める人たちの多くにみられる傾向は、利用者ではなく自分のいきがい観を先行させようとするところである。生きがい目的として志向されるとき、その対象は手段化される運命にある。生きがいはあくまでも結果であつて、決して目的として希求されてはならない理由がここにある。世阿弥に倣い、「心中には、願力を起して、一期の堺こなり」と、しっかり考え、結論を出すことである。

二十四、五

「この比、一期の藝能の定まる初めなり。さるほどに、稽古の堺なり。……さるほどに、外目にも、すは上手出で来たりとて、人も目に立つなり」。

能の稽古と向き合うにあたって年齢階層を7区分した世阿弥であるが、この時期に最も多くの紙面を割いている。それは、この時期を「一期の藝能の定まる初め」として重要視しているからである。謙虚であれ、自分を知れ、稽古に励めと諭し、「時分の花」でしかないものを「誠の花」と思い違いをしてはならないと繰り返す。

「初めなり」と断っていることに注目する必要がある。世阿弥の至言，“初心”の概念と深いつながりがあるからである。“初心”は道をはじめた時の新鮮な気持ちのことではない。一瞬一瞬を自覚的に受けとめ、常に道に精進すること、そこに“初心”はある。世阿弥は繊細に神経をめぐらせながら、一貫して稽古の重要性を強調し、稽古を怠るとき藝能は廃れると繰り返す。その根底に常になければならないのが“初心”である。

23，4歳を就職後、10年くらいと想定する。施設の歴史、職員数の多寡によって多少の相違はあろうが、まさに中堅職員という立場になる。施設現場の中核となつて、利用者の実態をアセスメントしてニーズを特定し、

何を、どのように支援するか計画書を策定するなど、率先垂範、後進の職員とともに利用者と相対峙する位置にある者のことである。

スポーツ選手であれ、映画俳優、歌手であれ、いわゆる花形になると拍手喝采を受け、もてはやされる。この時期を世阿弥は「稽古の堺なり」という。つまり、画期的に成長する時期であるという。そして、「本、名人などなれども、當座の花に珍らしくして、立合勝負にも一旦勝つときは、人も思ひ上げ、主も上手と思ひ初むるなり」といい、「これ、返す返す、主のため仇なり」という。なぜなら、「これも誠の花には非ず。年の盛りと、見る人の、一旦の心の珍しき花なり。眞の目利きは見分くべし」だからであり、結果的にせつかくの能力が本人の将来に禍根を残すことになるからだという。

福祉に限らず、一つの道に10年も打ち込めば、それなりの実力を身につけ、ベテランを凌駕するほどの力を発揮する者がいる。しかし、ものはそう簡単には見えてこない。人間はなおのことである。この頃の職員の力量は、まだ「時分の花」でしかないのである。そうであるのに、「極めたるやうに主の思ひて、早や、申樂にそばみたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事なり」と世阿弥は言下に切り捨てる。

「時分の花」でしかないのに、周囲に誉めそやされると一廉の実力者にでもなったかのような思い違いをして、一方的な持論を臆面もなく披瀝するなど、もつてのほかである。

「たとひ、人も讃め、名人などに勝つとも、これは、一旦珍しき花なりと思ひ覺りて、いよいよ、物まねおも直にし定め、なほ、得たらん人に事を細かに問ひて、稽古をいや増しにすべし」

仕事もでき、人望もあり、先輩職員と互角に議論ができたとしても、それはたまたまのことで謙虚に受けとめて、ますます支援の基本を正確に身につけ、なお、先達に事細かに教えを乞い、知識とスキルの向上に努める必要があるのである。

「されば、時分の花を誠の花と知る心が、眞實の花になほ遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この時分の花に迷ひて、やがて、花の失するをも知らず。初心と申すはこの比の事なり」

この中堅職員はそれなりの実力者であろう。しかし、仮に彼の知識やスキルが当代最高のものであっても、世阿弥流に言えばそこから初心がはじまる。つまり、スタート地点でしかない。それを最高点と受け止めると

き、その職員の将来はない。最低のことを「最高」と位置づけるところに発展・進歩は望めないからである。「時分の花」を「誠の花」と思い違いをすることが「誠の花」への道を閉ざすことになる、と世阿弥は手厳しい。

「我が位のほどをよくよく心得ぬれば、それほどの花は一期失せず。位より上の上手と思へば、本ありつる位の花も失するなり。よくよく心得べし」

世阿弥は、自己覚知の重要性を繰り返し述べる。自分の力、位置を正確につかんでいるなら風評に踊らされることはない。そうであるなら、一度身につけた知識なり技術なりは一生なくなることはない。しかし、自分の実力を実際の身丈以上にみる人は、若さの輝き、肩書きのお陰で咲いていた花まで散ってしまうことになる。知らないということを知るころ、「無知の知」に通ずる伝言である。自分がだれであり、だれでないかを知ること、それは非常に難しいことではあるがこの世界にでも通じる至言である。

まとめ

「風姿花伝第一 年来稽古條々」は、「三十四、五」、「四十四、五」、「五十有餘」と続くが、本稿は紙面の都合上、一度ここでおく。

「風姿花伝第一 年来稽古條々」は、世阿弥37歳の書で、書かれてからすでに約600年を経過している。にもかかわらず、現代のわれわれがなお強く心を揺さぶられるのは、世阿弥の普遍性にあるであろう。

世阿弥は、「風姿花伝」の中で自己覚知の重要性について繰り返し言及する。不遜を戒め、知らないことを知ることの大切さを強調する。これは単なる謙虚さの勧めではない。「能に果てあるべからず」、「能も住する所なきを、先ず、花と知るべし」の言葉に籠められた世阿弥の思いは、能に対する燃えるような情熱、絶えず奥を究めようとする真摯な態度の充溢以外のなにものでもない。それは、後にくる芭蕉の「旅」と同じ思想であり、キルケゴールの「真の絶望は、絶望していないことである」という逆説にも通じるだろう。道続ける者だけが、未知の世界に足を踏み入れることになり、いまある自分に絶望する者だけが、新しい自分を作ることになる。

福祉のスキルは、人が人を支援してきた歴史の中で多くの涙と失敗、工夫の積み重ねを凝縮した科学的支援法である。科学的技法の本質は普遍・妥当性にある。同一

の条件下で、手順さえ間違わなければ、だれが、いつ、どこでやっても同じ答えに行き着く。一方で、科学は日進月歩する。だから、スキルをそうしなければならない支援方法の最高地点として受けとめてはならない。それは、あくまでもスタート点である。現場の職員がそのようなスタンスで利用者に相対するなら、そのスキルはより高いものへと進化するであろう。逆に、示されたスキルを最高の価値として受けとめるとき、福祉の技術は止まることになる。

スキルを完成品として受けとめてはならない理由がいま一つある。スキルは多くの場合の、多くの利用者に有効な支援法として経験的、科学的に認知されたものではある。しかし、われわれの前にいる利用者は一人ひとり違う。それぞれに違う利用者に万人共通のスキルを画一的に適用するなら、一人ひとりのおかれている状況、その時どきのその人のありようは捨象され、結果的に利用者は“もの”として扱われることになる。利用者を“もの”として扱うとき職員もまた、“もの”（機械）でしかない。このような施設にあって、たとえ暖衣飽食の生活が保障されていたとしても、利用者は人間としての生活を享受することはないであろう。“食え”と与えられた食事は、「エサ」であって、「ご飯」ではない。人はエサでは生きられない存在である。スキルの奥に籠められている思い（福祉のこころ）を忘れてならない理由がここにある。

“初心”を重ねる者だけが新しい道を拓き、利用者とは新鮮な出会いを重ねることができるであろう。仕事には慣れても、人間に慣れてはいけない。世阿弥は600年の時を超えて、いまでもそのことをわれわれに語り続けている。

引用文献

野上豊一郎 西尾 実（2003）『風姿花伝』 岩波書店

八窪 清（1980）『くすのき寮の10年』大阪府立金剛コロニー